



エレオノー



第一章

～始まり＋始まり＝少女～

つぼけん

プロローグ

序章 『始まる以前の始まり』

序章、これは小説には欠かせない始まり方だ、作家によってはエピローグという言葉を使うが、私はあえて序章と言おう。別に古風が好きとか日本語に特別な執着があるとかそういうわけじゃない。ただ単に序章という言葉を使うだけだ。小説の枕詞を称しているだけの意味合いで、特別な意味はない。それよりも、大切なことは枕詞のほうだ。つまりは内容が大事だ。

読み手をその物語に引き込む大事な文章、それが序章だ。この序章によって物語に神秘的な意味合いを込められる。それによって読み手にその物語に好奇心を持たせるのが狙いであろう。読み手はまるで電灯に群がるハエが如くその物語に魅せられる。それが序章の価値であり重大な責任だ。しかし、この物語では序章は大して重要な意味合いを持たない。何故ならこの物語は人間が主役だからだ。

確かに小説は一般的には人間が主役である。もちろん中には犬が主役だったり、猫、鳥、虫、恐竜、宇宙人、はたまた銅像や金属が主人公の物語だってあるかもしれない。しかし、よく考えてくれ、そもそも人間に序章が存在しているだろうか。あなたの生まれる前の物語をあなたは知りうるができるだろうか。

否、不可能である。あなたは生まれる前自分の物語を知ることはありえないであろう。何故なら、あなたが生まれた瞬間にあなたの物語が始まるのだから。たとえ、あなたが今の自分より前、つまりは前世のあなたなる者が存在していたとしよう。でわ、それがあなたの序章となりうるのだろうか。

いや、違う。それはあなたであってあなたではない。例えるならば、前世のあなたは同じ作家が書いた以前の物語の主人公なのだ。つまり、あなたは今回の主人公であるため、以前の作品とはまったく関係がない。あなたの物語はあなたの誕生と共に始まった、まったく別の新しい物語なのだ。

小説もそうだ、序章の段階ではまだ物語は始まっていない。それはあくまでも読み手を本編へと導入させるさせる入り口に過ぎない。物語が始まるのはもうちょっとあと。入り口は入り口でしかない。それ以下でもそれ以上でもない。

詰まる話、序章はただの入り口に過ぎない。しかし、入り口はとても大切だ。入り口がなければその先には進めなくなる。始まりがなくなってしまうのだ。それゆえ、それが序章の役割であり

最大の責任なのだ。

物語は入り口から、そう今から始まるのだ。

それは、闇と呼ぶにはあまりにも儚かった。

それは黒、真に迫るような黒だった。黒にはほかの色が混ざらない。

それが黒であるが由縁、それが黒である証なのだ。

黒の存在が確立されるためには黒単体である必要がある。

他の色が混ざってしまうと、たちまちそれは黒ではなくなってしまう。それが黒だ。

しかし何も俺は黒という色の存在を確立するためにこんなことを話しているのではない。

真意はまた別にある。それは目の前にあるのかはわからないが、俺の近くに存在していることは確かだ。

真意、それは本当に伝えたいこと。本当に心のそこから伝えたいこと、それは、今を黒によって支配されているということだ。

もし、ここで目の前の物は何かと問われても俺は間違いなく黒だと即答するだろう。

何故ならば、それは本当に黒いからだ。いや『それは』という言葉には少し語弊があるな。『そこは』に変更しておく。

そこは本当に黒に支配されているのだから。

ここは夢なのかと問われれば、夢なのかもしれない。現実と問われても現実なのかも知れない。そもそも、現実とはなんだ？仮に『今この場で起きていること』と定義するなら夢の中でも今この場で起きていることは

現実と定義することができるし、覚醒時でも今この場で起きていることが現実であると定義するならばそこもまた現実だ。

現実とはもともと曖昧な状態のことをいうのかもしれない。

しかし、今俺が落ちている状態は恐らく、夢。いや、夢と仮定してく。

何故なら覚醒時の現実で俺はこんなにも寂しそうな黒は見たことがないからだ。この黒い闇は本当に黒いそして孤独だ。

俺はいつからこの黒い闇にいるのだろうか、そもそも夢の中に時間という概念を求めていいものだろうかと疑問を持つが。

なんだか、ずいぶんと長くこの闇にいる気がする。

「とりあえず、歩くか。」

この夢がこの後どんな展開に発展するかわからない。もしかしたら、このままの黒い闇が続くだけなのかもしれない。

変な話だが自分の脳の中で起きている事なのに本人にその先が読めないなんて。しかし、夢というものは元来そういうものだろ。

自分の脳の中で見ている幻にも関わらず本人には全くとっていいほど関与させてもらえない。恐らく皮肉とはこういう事をいうのだろうか。

起きてる時は自分とナイスなコンビネーションを働かせて日常のあらゆる状況に対処しているというのに夢の中ではまるで俺を翻弄して遊ばれているようにも思える。何故、こんな裏切り行為を受けるのだろうか。全くもって身に覚えがない。もしかしたら俺の日ごろの行いにひっそりと腹を立てているのだろうか。それで密かに夢の中の、俺の意識が届かない世界で意地悪をしているのだろうか。自分の脳なのにその答えもわからないなんて。

本当に皮肉なやつだ。

突然、光が見えた。とても幽かで弱々しい光だ。今にも消えそうで妖艶な色をかもちだしている。

正直その光も元に行くか迷った。もしかしたら罠なのではないか、そこに行ったら、何かおそろしい物が現れるのではないか。

俺の経験上、夢とはそういう物だ。しかし、光は待つてはくれそうにもないほどおぼろになっていく。

「ここにいても。何も変わらないか。」

そう言う前に俺の足は駆け出していた。はっきり言って怖かったのだ。誰がこんな闇に好きでいるものか、俺はそこまで根暗ではない。はずだ。

走り出すと光がずいぶんと実体化してきた。さっきまでのおぼろな姿が嘘みたいだ。これからどんな展開が待っているのか、頼むから幽霊やモンスターだけは勘弁しろ、俺は子供の頃からそういった物が大キライだ。

だが、この意地悪な脳は俺と共に成長してきたわけで、もし、意地悪が目的ならば、その可能性は十分にある。効果的に俺の精神を揺さぶることができるからだ。

だが、もしそういった類の物が現れたとしても結末はわかりきっている。いつもどうり、モンスターやら幽霊やらが現れ、それに驚き、俺は目を覚ます。シーツがビショビショに濡れていて、こう言うのだ『悪い夢だった・・・』と。

しかし、結末がわかっているからってあまり慣れないもんだな。さて今回はどんな物が現れるんだ。

だいぶ光が現実味をおびてきた。以外に光は大きく、さっきいた所からかなり離れていたことに気がついた。

そういうばだいぶ走った気がする。疲れていないことからして、やはりこれは夢なんだと改めて思った。

光に近づくと一本の長い影が現れた。

影はいつの間にか足元まで伸びている。その場で足を止めて、目線でその影を辿った。

そこにいたのは緑の服の塊のだった。

正確に描写するならば、緑のダボダボの服を着た何かの後姿がゆっくりと歩いていた。その緑の塊は肩で魔法使いが持ってそうな複雑に絡み合った枝で作られた杖を担いでいた。その先端にランタンが引っ掛けてあり、やわらかい光を放っていた。

光の正体はコイツか。

ランタンは不思議なことにその大きさや放つ光からも到底思えないほど周囲を明るく照らしていた。

周囲の光は大きいのだがランタンから発せられる光は少しもまぶしくなかった。

目線をランタンからのしのしと前進する緑の服の塊に移した。その緑の服の塊は背はそんなに高くない。

おおよそ小学生五・六年生程の背丈だろう。よく見ると、頭に黒い帽子を被っていた。

しかし、頭より少し帽子のほうが大きいのか横にずれている。

ふと、帽子と髪の毛の隙間から肌が見えた。どうやら、モンスターの可能性は低いようだ。

だとしたら幽霊か？。少し勇気が出てきた、モンスターよりも人間の形をしている幽霊の方が遙かにマシだからだ。

人間の形をしているのであれば幾分言葉は通じるはずだ。

もしかしたら交渉しだいでは、そんなに驚かされずに起きれるかもしれない。

すくなくならず見るも無残なモンスターの咆哮を食らって起こされるよりはいい。

よし、話しかけてよう、それにまだこの夢が悪夢と決まったわけでわない。

「おい、ちょっと・・・。」

意を決して言葉を放ってみた。『頼むから言葉が通じてくれ』と心の中で20回ぐらいを一秒足らずで唱えてみる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

沈黙が帰ってきた。

これは予想外だ。良い悪いはさておき、何かしら意外な反応が返ってくるとは思っていたが。まさか沈黙とはな。

もしかしたら、聞こえてないのか。いや、耳がない幽霊かもしれない。恐る恐る髪の毛で隠れている耳を目視で探してみた。

すると、ゆれている髪の毛の隙間から耳が見えた。しかも、その耳にはなにやら黒い線が垂れ下がっている。

もう少し、近づいてその線の正体を確かめた。どうやらイヤホンらしい。最近の幽霊も音楽を聞くのか。

「あの一ちょっと。聞こえていますか。」

どうやら、本当に音楽を聴いているらしい。なんだか、拍子抜けしてしまう幽霊だな。

でも、このままでずっとこの緑の服の塊の後を歩いていても仕方がないしな。

だが、幸いにも俺は音楽を聞いている人に声音以外でのコンタクトをとる方法を思い出した。

トントン。緑の服の塊の肩を軽くたたいた。

「わぁ～！びびびびびびびっくりししたよお！」

振り返ったのは、急に肩を触られびっくりしたのか、腕をばたつかせて驚いた感情を全身で表現している少女だった。

決して幽霊やモンスターの類ではないと直感した。

「悪いな、驚かせて」

少女はイヤホンを外しながら、首を傾げる仕草をした。

俺はもう一回

「悪いな、驚かせちゃって。さっきから呼んでたんだけど、音楽聴いてたらかさ」

少女はまだ驚きを隠せないでいるが、なんとか話を聞こうとする努力をしているようにみえた。

「あぁ～いいんですよ。ぼくこそ音楽に夢中になってましたよお」

少女はそういうと可愛らしい表情を見せた。よく見ると少女の被っている帽子は警察官の帽子によく似ている。

「お兄さん、迷子になったんかぁ〜？」

おもむろに少女の方から話しかけてきた。

しかし、難しい質問だ。自分の夢の住人に迷子なのか？と聞かれても、どう答えたらいいのだろう。

これは俺の夢の中であって、俺の脳が作り出した幻。幻の中で迷子などありえるのだろうか。

それに一応ここは俺の脳の中だから自分の中でもあるし、迷子とは少し違う気がする。

ここで、素直に「ここは俺の夢の中だから迷うわけないだろ」といいたい所だが・・・。

俺は少女の顔をチラリとみた。少女は口元から少し刃を出し、にこやかな表情で俺を見ていた。

いくら夢の中の人物とはいえ、こんなに幼い少女にいきなりそんな無粋な答えを出すわけにもいかないな。

「そうなんだよ、迷っちゃてな。ここがどこだかまったくわからないんだよ」

少女は少し驚いた顔を見せたが、すぐにさっきまでの可愛らしい表情に戻った。

「なら、ぼくの後についてきなぁ〜。出口まで送るよぉ〜」

少女は自分の腕の長さより大幅に余った服の袖で軽く手招きをした。

「お前はここがどこだかわかるのかい？」

俺はこの可愛らしげな夢の住人に少し付き合っあげようと思った。どうやらこの夢は悪夢ではなさそうだ。

なら、久しぶりに見るファンタジーな夢を楽しむべきだな。それに、出口を知っているみたいだし、このままの流れでいけば無事に安らかな目覚めが期待できそうだ。俺は少女の横について、歩幅を合わせるように歩き出した。

少女は担いでいたランタンをよいっしょっと軽く浮かせて担ぐ位置を直しながら言った。

「ここは、ぼくの家のお庭ですよお～」

「随分と広いお庭だな。」 俺は軽く驚いたふりをした。

「一人で住んでるのか？」

「一人じゃないよ、お母さんとお姉ちゃんもいるんよお～」

「そうかぁ、お父さんは一緒じゃないか？」

「お父さんはお外に住んでるんよお～」

「なんで一緒に住んでないんだ？」

少女は少しうつむいた。

「ごめん。なんか変なこと聞いたな・・・。」

慌てて少女に謝った。いくら夢の住人だからっていきなりこんなこと言われたら誰だって答えづらいものだ。

「ぼくお父さんと一度も会ったことないんよ。ぼくが生まれてすぐにお仕事でお外にいったんだあ〜」

「そうかあ〜寂しいか？」

少女の顔を覗き込んだ。

「大丈夫よお〜。お母さんもお姉ちゃんもいるよお〜」

「ならよかった。」

内心ほっとした。俺のせいで、少女に悲しい想いをさせたらどうしようと思っていたが、どうやらこの子は見た目以上に強い子なんだな。

しかし、なんで、俺の夢にこの少女が現れたんだ。よく夢は寝る前に見た映画とかマンガや、その日の出来事を参考にしてみる物だと聞いたことがあるが。寝る前にどこかでこの少女を連想させる何かを見たのだろうか。

うーん。心当たりがない。

寝る前に見たテレビもお笑い芸人のの特番だったし、学校のクラスメイトに借りて読んだマンガも海賊の冒険活劇だったしな。

何がこの少女を連想させたのだろう。

「そういえばお名前は何かあ〜」

突然の少女の質問に俺の思考は停止した。

「えっあっ名前か？俺は飛鳥。十馬 飛鳥っていうんだ。」

「とーま あすか さん？ なんか、どっちも名前に聞こえるなあ〜」

凶星だった。昔からそうだ、俺の名前はよくそうやってからかわれたもんさ。

そういえば、この悩みを昔、親父に相談した事があったけ。そうしたら、親父も昔同じような事で悩んだことがあったらしい。

この『十馬(とうま)』という名字はお背負った人はみんな同じような悩みを持つみたいだ。

しかし、今となってはあまり気にしてない。これから一生背負っていくんだ、嫌っても無駄な体力を使うだけだしな。

「ああ。よく言われるんだ。ハハハ」

明るく少女の質問に答えた。

「お前はなんていう名前なんだい？」

「ぼくはねえ〜・・・。ううん。」

少女は言いかけた言葉を飲み込むと、少し首を横に振った。そして閃いたように言った。

「ぼくの事は『こむぎい〜』って呼んでくれればいいよ。」

「『コムギー』？」

「ちがうよお～、今あすか、カタカタの発音したでしょ？」 少女はふてくされた表情をした。

「あっ、うっうん」

片仮名って・・・。

「ちがうんよお～。『こむぎい～』はぜんぶひらがなの発音なのよお～。それにちゃんと『ぎい～』の小さい『い』も発音するんよお～」

「そっそうかぁ・・・。ひらがなの発音ね。わかったがんばってみる。」

正直、難しすぎるぞそれは。どうすればいいんだ？少しやわらかめに言えばいいのか？それとも空気が抜けた様に発音すればいいのかな？俺はどうしたらいいんだ。こんなこだわりは初体験だぞ。

「本当はもっと違う名前があるんよお～。でも、長いし、言いづらいからこむぎい～でいいさあ～」

「わかった。よろしくな、こむぎい～」 少し、空気の抜けた様に言ってみた。

「こちらこそ、よろしくよお～」 少女は長い袖を軽く振って、にこやかな表情に戻った。

それを見て、少し安心した。どうやら俺はひらがなの発音を習得したらしい。

『少女』改め、こみぎい～に俺の疑問をぶつける事にした。

「あのさあ、こむぎい～」　ぎこちない。

「なんよお～」

「ずっと気になってたんだけど、ここはいつもこんなに暗いのか？」

そう、ずっと俺はこの黒い闇をずっと疑問に思っていた。自分で言うのもなんだが俺の心は至って平常だ。

そりゃたまにはイラついて心を閉ざしてしまう事もあるが、それは人間なら誰もが持っている防衛本能というやつであり、決して特別なことではない。しかし、最近は特別嫌なことが起きて、心を閉ざした覚えは無い。

なら何故、ここはこんなにも黒く、孤独な闇なのだろうか。まるで、他人を一切受け付けないような、全てを諦めているように思えるほどに何も無い。それは生きるのをすら辞めたような寂しさがあった。

夢とは自分の心の内面の世界と聞くが、俺の心はこんなにも何も無いものなのか。いや、そんなはずは無い。

俺は一度も人生を諦めたり、自分を寂しいと思ったことは無いはずだ。

ましては、こんな黒い闇にとり憑かれていれば少なくとも、私生活に影響がでるだろう。

少なくとも現時点で実生活にそんな兆候は現れていない。

それに、ここはただの夢だ。そんなに深く考える必要もないか。

しかし、夢の中の住人であるこの子にまともな返答など期待していない。

この子は俺が創りだした幻だ。幻との会話もまた幻でしかない。

「いつもはものすごくキラキラしてんよお～。それに色々な色があってなあ～。すんごく綺麗なよお～」

こみぎい～は全身を使って自分の伝えたい光景を表現していた。
そのバタバタはとても愛らしかったが、表現している光景は伝わってこなかった。

「そうなんだ。でも、なんで今はこんなに暗い闇に包まれてるんだ？」

こむぎい～は担いでいるランタンの光に目をやってから、俺の顔を見ながら残念そうに答えた。

「いま停電してんよお～。そんでなあ、そんでなあ、とつぜん、どよ～んとこの黒いのが現れたんよお～」

「停電かあ～そりゃ残念だ。俺もそのキラキラってやつを見たかったな。」

正直残念だ。どうせならこんな黒い闇に包まれた場所じゃなくて、そのキラキラした中でこの緑の小人に会いたかったな。

そっちのほうがよっぽどファンタジーな世界に浸れるのにな。

「でもでも、おかしいんよお～。おかしいんよお～」

「何がおかしいんだ？」

「普段わなあ～停電してもキラキラはのこるんよお～。でも今回はキラキラまで消えたんよお～

。

まるで誰かに隠されたように、ポンと消えたんよお～」

相変わらず感情を身振り手振りで説明していたが、そのまん丸な瞳には今にもあふれ出しそうなほど涙が溜まっていた。

「怖いかな？」

「怖くないよお～。このランタンがあるから大丈夫よお～。それに・・・」

「それに？」

「今はあすかがいるんよお～。」

「ああ～そうだな。俺がついてるから心配するな。」

そういうと、大幅に余った長い袖で軽く頭を押さえた。

照れ隠しのつもりだろうか。

「でも、今のあすかはただの迷子の子猫さんなんよお～。」

なんだ、不満なのか？誰も好きで自分の脳の中を彷徨っているわけではない。

と、言いたかったが。あまりにもそれは大人気ない気がした。それに、ここで直接お前は俺の夢の住人だと言ったら、

この子はどんな反応をするのだろうか。もし自分が突然あなたは私の夢の中の住人だと、見知らぬ人に告げられたら間違いなくその場で発狂してしまうだろう。

それを俺はこんな幼い子にしようとしているのだ。あまりにも残酷だ。

あいにく俺の良心はそれを未然に防ぐ事に成功したらしい。

「ああ～確かにそうだな。俺は今迷子だ。でも、急にモンスターやらゾンビやらが襲ってきたらなんとか君を逃がすぐらいの努力はできるぞ。たぶん・・・。」

ああ、きっとできるさ。いくらモンスターといってもここは夢だ死にはしないさ。それにいざとなればこの子を逃がしてから、必死に覚醒する努力をすればいい。そうすればいつもどうりの悪夢で終わるさ。

ついでに、この子も逃がしていくから、起きた時に罪悪感に襲われることもないだろう。

しかし、こむぎい～からの返答は思いもよらないものだった。

「相手は強いよ～、あすかじゃ無理だよお～。それにモンスター退治はぼくのお仕事だしね」

「そんなことないさ。せめて、囧ぐらいにはされるさ」

俺はそのセリフを言った後に気がついた。うん？お仕事？この子は今確かにお仕事と言ったぞ。

「お仕事？」

「そう、モンスター退治はぼくのお仕事さあ～」

「待ってくれ、ということはこの黒い闇にモンスターがいるということか？」

「たまにねえ～」

まるで、何もなかったかのように、言い放った。

この夢はほのぼのファンタジーって設定じゃなかったのか？急にモンスターとか聞いてないぞ。

「どんな、モンスターなんだ？」

「もしかして、あすか怖いのお～？」

横目で、俺の顔を覗き込むように言った。

「ちっ違う。参考までにだ。これから戦うかもしれない相手を知っておいた方が戦いやすいからな。」

「色々いるさあ～。ちっちゃいのから、大きい。それに緑のも青いのも黒いのもいっぱいいるよお～」

もし出てきても何色でもいいから極小のやつにしてくれ！頼むから！！
果たしてこの願いは一体誰に届けばいいのか。

「その大きいのはどのぐらいなんだ？」

「うーんと、4テラバイトより小さくて、6500ジュールよりは大きいよお～」

どこぞの単位だそれは！！！！！！！！！！そんな言葉学校の授業でも聞いたことないぞ！！

それとも、単に俺が学校サボりまくっているから知らないだけか？

この子は一体どこでそんな言葉を覚えたんだ。いや待てよ、ここは俺の夢であるわけで、つまり俺の精神世界で創られているわけだ。俺が知らない言葉が出てくるわけがない。

ということは、俺は以外に頭いいのかもしれないぞ。どこかで聴いた言葉を一瞬で精神世界に刻み込んでいたんだ。

驚いた、自分にこんな才能があったなんて。もしや、俺は夢の世界でなら歩く百科事典になるのも夢ではないな。

いや、何か矛盾しているが、そこは無視しておとこう。

「いや、その・・・。あれだ、センチメートルだとどのぐらいなんだ？」

この質問がよっぽど難しかったのか、長い袖からその小さい手をやっとのことで出し、しばらく何かをつぶやくと自分の指を数えだした。

「うーんとたぶんこのぐらいよお～」

そういうと、その指を俺が見えるようにかざした。

指は3本立っていた。

「3メートルなのか？」

「う、うん。」

その声に自信が込められていないのは明らかだ。明らかに笑顔がひきつっていた。

「こんな質問ははじめてなんよお～」

困惑した顔も可愛かった。

「そうか、それは悪いことしたな」

必死に慰める。

計算が苦手なのは俺の影響か？そりゃそうだ、普段ろくに勉強してないんだ夢の世界のだからっていきなり

天才になれるわけないもんな。すまないな夢の住人、俺もうちょっと勉強するよ。

「わかった、質問を変えるよ。」

「なんよお〜？」

「そのモンスターはどんな攻撃をしてくるんだ？」

これならわかるはずだ。いくら大きさがわからなくても、相手の動きまでは見えるはずだからな。

「それは、これからわかるよ。」

こむぎい〜が今まで見せたことのないほどの真剣な面持ちになった。

「それは、どういう意味だ？」

「何者かがこの空間に侵入してきているんさあ」

明らかに口調が変わった。

「侵入？ どういうことだ？ だってここは俺の・・・」

「そこお！！！！」

その勢いのある言葉で俺のセリフが途切れた。

見るとこむぎい～はランタンでなにやら上を指していた。

黒い闇の中に別の色が混じっていた。

「なんだあれ？」

「しっ！静かにするんさあ」

言われたとうり口をつむる。

灰色だ。そこには真っ黒の空間に灰色で覆われた何かがいた。

黒い空間の一部がまるでゴムシートのように伸び縮みしてうごめいているようにも見える。

足が動かなかった。何かが迫ってくるのはわかるが、あまりにも唐突だ。どうすればいい？

ふと横を見ると、こむぎい～はつま先を立て自分の慎重の限界を超える勢いでランタンを上突き出している。

何かに抵抗しているようだ。

「むう～～～！！」

苦しそうな表情の少女の横で、俺は硬直していた。

「これはちょっと、重たいねえ」

そういうと、こむぎい～は杖を両手で支えた。

その瞬間だった。限界までに引き伸ばされたゴムシートの表面に網目が見えた。

どうやらこの空間は何層にも編みこまれた黒い糸のようなもので構成されているみたいだ。

「だめだぁ！！くるよお～！！！」

ブチブチブチブチブチ

あたりに何かが引き裂かれる音が響いた。灰色のゴムシートの裂け目が広がっていく。

と、同時に黒い鉄球のようなものが落ち、その振動が地面に伝わってくる。

振動でかなり大きく重たいのもだとわかった。

「なんだ、何が起きてるんだ！」

「ごめん、侵入を許したぁ。走るんよお～」

そういうと、こむぎい～は被っている帽子が落ちないように右手で押さえ、ランタンの光を揺らしながら走り始めた。

「待ってくれ！なにが起きたんだ説明してくれ！！」

緑の服の塊の後を追う。

「モンスター～なんよお～。逃げるんよお～」

「モンスター！？」

自然に走る速度が上がった。

「モンスターってあんなにデカイのか！？3メートルじゃなかったのかよ！」

「こむぎい～は一匹とは言ってないんよお～」

「一匹じゃない？それじゃあれはモンスターの塊だって言うのか？」

「そうよお～、とりあえず走るんよお～！侵入したては、すぐには動けないから、なるべく今のうちに走るんよお～」

ちくしょう、何だよ。急展開すぎだろこれ！ほのぼのファンタジーな夢じゃなかったのかよ。まったく、何がなんだかさっぱりだ。

それに、さっきからずっと思ってたんだが、この夢いくらなんでも長すぎないか？夢の中だと時間の概念がないからなのか？

それにしても、長すぎるだろ。夢ってもっと断片的なんじゃないのか？

ダメだ、考えててもらちが明かない。

「もうすぐよお～！！」

走る服の塊が唐突に口を開いた。

「何がだ？何がもうすぐなんだ？」

「出口よお〜。」

こむぎい〜はランタンで前を指した。その先を見ると確かに何かが小さく光っている。

「いそぐんよお〜あれが動き出す前に！」

俺は必死にその光に向かって走った。あそこにたどり着けばこの夢ともおさらばできる。少なくとも俺の本能はそういつている気がした。

その時だ。

後ろから、大群で何かが迫っている気配を感じた。

「うそ、早いんよお〜。おかしんよお〜」

こむぎい〜が慌てて後ろを振り返った。

「なんだ？」

おもわず声を張り上げた。

赤い影が、背後から股を通りスーと伸びてきた。その影に反応して後ろを振り向いた。

「なっ!？」

そこにいたのは、モンスターと呼ぶにはあまりにも可愛すぎる存在だった。

昆虫? そう昆虫だ、それは昆虫の足を持っていた。しかしそれも足までだ。上半身はよく知っている生物に似ていた。

人間だ。まるで、ゴキブリに人間の上半身を移植したかのように見える。
甲高い奇声を発しながらそいつはまるで魑魅魍魎が如く襲い掛かろうとしている。

『気持ち悪い』

一瞬俺の頭はこの言葉に支配された。

瞬く間にその存在はすぐ間近まで迫ってきていた。俺の脳は思考する事をやめたようで、すでに腰には力は残っていなかった。

俺はその場に崩れた。

「ああああああああああ!! あああああああああああああああ!! !!」

ちくしょう、ちくしょうちくしょうちくしょうちくしょうちくしょう!! 今までの人生の中でこんなに叫んだことなんてあったか?

ちくしょう、なんて悔しいんだ。

非力な自分が悔しいんじゃない。そりゃそうだこんなおぞましい存在を目の当たりにして、誰が勇敢などという言葉が口に出せるものか。

違う。そこじゃない。俺が悔しいのは、そこじゃないんだ。

「大丈夫さあっ、ぼっぼくがあすかを守るんよお〜」

そういう、少女の手は小刻みに震えていた。

俺の体はランタンの光によってできた少女の影に包まれていた。

なんて、不甲斐ないんだ！さっきまでもしモンスターがでてきても囷ぐらいにはなれると豪語していた自分が、
今はこんな小さな細い手によって守られているなんて。

囷だと？逆にめちゃうちゃ足ひっぱてるじゃねーか！！！！

「むうううんんんん」

少女の腕は限界にきていた。振るえがさっきよりも大きく、息もどんどん荒々しくなっている。

何やってるんだよ！！動けよ俺の足！！！！

動け！動け！動け！動け！動け！動け！

ほらもうちょいだ！

お前なら動ける！

いけよ！立て！！

早く！！！！！！！！

「うおおおおおおお！！！！」

よし！今だ！！

その場に立ち上がり、震えている足を必死にコントロールした。

まるで、生まれたてのヤギだな・・・

「情けねえ・・・ビビッてやんの・・・それどころじゃねーのにな・・・」

おぼつかない足を操って、ようやく少女の元に立つことができた。

「うんよお？」

少女が少し驚いた表情を見せた。

俺は少女の小さな手に重ねるように自分の手を置いた。

杖は想像以上に重かった。これをこんな弱々しい女の子が支えていたなんて。

「くっ！意外な重いなこれ！！」

「普段は軽いんよお～。それだけあれは巨大なんよお～」

光の壁が俺たちをあれからから守っていた。四方八方らかなんども体当たりし、そのたびに断末魔をあげ弾かれていた。

気がつくとなれはドーム状に俺たちを包み込んでいる。視界に映る物はすべておぞましい化け物だ。

できればこんな光景は二度と見たくはないな。

「このまま走るんよお～」

「おう！」

俺たちは杖を二人で支え、化け物を振り払うように光のもとへと急いだ。

光の正体は穴だった。黒い闇の地面に白い光の穴が出現していた。だが、どう見てもその穴は小さく拳ぐらいの大きさしかなく、人が入れそうにもない。

「あすか、ちょっとこれもってるんよお～」

少女は俺に杖を託すと、穴のほうへ駆け寄りそのまま膝を地面につけた。

「ああ！」

今まで以上に杖をしっかりと握った。一人で持つとまた一気に重くなる。

「ちくしょう、また重くなりやがった！頑張ってくれよ、俺の腕！！」

少女に背を向けて、ランタンをより高い位置にかざす。どうやら本当に怪物はこの光の中に入ってこれないようだ。

「がんばるんよお～もうちょただからあ～」

「おう、任せろおおお！！」

少女は上着から透明なガラスでできた小瓶を取り出した。
チェスの駒の様なふたを開けると、その中には砂のようなキラキラした粉が入っている。
砂を少しだけ穴に振りかけると呪文のような言葉をつぶやいた。

その瞬間ランタンの光がバチバチと突然揺らぎ始めた。

「おい！光が消えそうぞ！大丈夫なのか？」

「大丈夫よお～。余波を受けただけ、じきになおるんよお～」

「余波？なんのだ？」

「これの。」

この空間にもっとも似つかわしくない色を発する光が背後から迫ってきた。銀色に輝き今にも闇を包むかのように
あたりに広がっていく。

「うっ」

あまりにもその光は眩しく、おもわず腕で目を覆った。

ほんの一瞬だが、心地よい静寂がこの場を支配していた。

この心地よさを俺は知っている。そう、こんな感じだ。目覚める境目の夢でも現実でもない、なんともいえない浮遊感が漂う世界。

夢と現実の狭間。

もしかしたら、このまま目を開けると、慣れ親しんだ天井が見えているかもしれない。「ああ～変な夢を見ちゃったよ」といつも通り、学校の身支度を始めるんだ。

そうだな、まずは歯でも磨くか。

あわよくば、そうなってほしいものだ。

まぶたにあたる光が、少し和らいでいくのがわかった。

徐々に目を開けると、そこには苦しそうにのたうち回っている化け物の姿があった。

俺は光の正体を確認しようと後ろを振り向いた。

先程まで、拳サイズの穴が、まるでクジラでもすっぽりと入っちゃいそうなほど大きくなっていた。

穴の周囲にはキラキラした光が降りたての雪のように舞っている。

それは今までこの空間で見てきた光の中で一番きれいで、暖かい光だった。

「あすかぁ～、早くこの中に入るんよぉ～」

その声で我を取り戻した。

俺は穴の縁に立った。

「まさか、これに飛び込むのか？」 声が引きつる。

無理もない、底が見えないのだ。

俺は少女の顔をのぞき込んだ。

「うんよぉ～、でも早くするんよ！今は周囲の情報を誤魔化してるだけ。すぐに修正がかかって塞がるんよぉ～。

早くいくんよぉ～」

少女は慌てているのか腕をバタバタさせている。

その時だ。化け物が回復したのか再びランタンの光に突進してきた。

ランタンの光がどんどんおぼろになっていく、消えそうだ。

「早くするんよぉ！！！」

少女が声を張り上げた。

「駄目だ！！お前が先に行け！約束しただろ、俺が囷になるって！！」

そうだ。俺は約束した。この少女を守るって。なのに何もできてねえ。情けなすぎだろ。それにいくら夢の中とはいえ、こんなか弱い少女を怪物どもの元に一瞬でも残せるわけが無いだろ。俺はそんなに薄情な男じゃない！

俺は決意を固めた真剣な顔だった。

「ぼくは大丈夫なんよお～。家ももう近いよお～。それに僕はこの中には入れないんだ。」

少女はどこか悲しそうな顔をした。

「じゃ～家まで送ってやるさ！！さすがにこんな所に残せるわけ無いだろ。」

「駄目なんよお～、そんな時間ないんよお！穴がもうすぐで閉じちゃうんよお～」

「俺なら大丈夫だ！」

そうだ、俺ならあいつらに襲われても「嫌な夢だったと」目を覚まして、諦めればいい。

でも、いくら夢でも少女がこのあと化け物に襲われると分かって逃げられるかよ！

「大丈夫だこむぎい～。これは俺の夢だから。目醒めたらそれで終わる・・・」

それはあまりにも突然すぎた。

「倒れてる」そう思ったときにはもう遅かった。俺の体はもう自身ではコントロールできなぐらい領域までに体勢が崩れていたのだ。なんとか、目線を保つと、今にも泣きそうで申し訳ながこみ上げているこむぎい～の顔があった。

少女は俺を突き飛ばし、穴に落としたのだ。

俺の体は穴の入口に入っていった。銀色の光はとてもまぶしく輝いていた。

普通、少なからずおちるという行為には恐怖が伴うが、この中は違う。恐怖は感じなかったのだ。

というより、何も感じるができなかったのだ。まるで、この光の穴には存在感がない様に思えた。

穴の入口がどんどん小さくなっていった。ふと少女がこちらをのぞき込んでいるのが見えた。

これで、いいのか本当に。少女をこのまま残して、逃げるなんて。なんて卑怯なやつなんだ。こんな終わり方最悪な悪夢だろ。

うん？悪夢？

そうだ、もう一回この夢を見ればいいんだ！！夢ならきつと頑張ればもう一回見れるさ！それが夢ってものだろ！

「こむぎい～！！また会うぞ！！！！！！！！必ずだ！！！」

俺は力いっぱい声が届くように叫んだ。

どうやらその言葉が伝わったのか、少女は二回うんうんとうなずいた。その後何かを言ったが、俺にそれを聞く術はなかった。

その長い大きく余った袖を軽く横にふった。

穴が先程よりも小さくなって行っき、とうとう少女の姿は見えなくなった。

「待ってるよ、いつか必ず同じ夢を見てやるからな！！その時こそ助けてやる！！！」

体をひっくりがえして穴の底を覗いた。さっきよりも光が濃くなっているように感じる。

もうすぐ、目覚めるんだ。俺の本能はそう言っていた。

落ちるにつれて光が濃くなっていく、次第にその光は自分の体を包んだのか、何も見えなくなった。

あたりが真っ白に包まれた。

今自分の体はどこにあるのか分からないが、腕を精一杯伸ばしきって決意を握りしめる。

少女との約束を改めて口に出し誓った。

「待ってろ！」

エレオノール 第一章 「始まり+始まり=少女」完